

経済学者の移動と経済学のグローバル化

久保 真 准教授（経済学史）

「人の移動」と聞くと、どんなトピックが頭に浮かびますか？ 例えば、少子高齢化の進む日本は海外から労働者を受け入れるべきかどうか、という問題が真っ先に浮かぶかもしれません。でも、今世界ではもっと積極的な意味での「人の移動」、すなわち優秀な頭脳の持ち主（およびその潜在的な持ち主）の国際的な移動や競争が大きな話題になっていることをご存じでしょうか？ 国際的な大学ランキングがマスコミを賑わせたり、従来横並びだった大学教員の給与が研究成果に応じる形に見直されたり——日本はこれからです、イギリスなどではここ十五年ほどで劇的に変化しました——というのは、そうした事情の反映です。いまや研究者も学生も国境を越えて移動することが当然の時代に入りつつあります。そこで本稿では、経済学史の観点から、経済学者の国際的な移動について、さらには、そうした移動と経済学の「グローバル化」との関係やその功罪について考えてみましょう。

経済学の歴史を繙くと、他国を訪れたことで新たな着想を得た経済学者は珍しくありません。古くは、十八世紀イギリスに生まれたアダム・スミスが、旅したフランスでその名も「エ

コノミスト」と呼ばれる人たちと交流し、『国富論』に結実するアイデアを得たと言われています。また、十九世紀ドイツに生まれたマルクスが、亡命先の大英図書館での猛勉強の末「資本論」を執筆したというのも、有名な逸話です。しかし、それで経済学がグローバル化したのか、国際的に標準化された学問になったかという点、そうではありません。

例えば、経済学部必修科目「経済と経済学の基礎」で教科書として使用されることの多い『マンキュー経済学』シリーズは、世界十七カ国語に翻訳されているそうですし、英語版をそのまま教科書として使っている国も多くあります。こうした傾向は大学院レベルになると一層顕著であり、ほとんどの国で、同種の教科書で同じ理論（「ミクロ・マクロ経済学」や分析ツール（「数学、統計」を身につけ、同じ言語（「英語」）で研究成果を発表するよう求められます。このような特徴こそ、私が右で「国際的に標準化された」と述べた際に意味したものです。

では、経済学が国際的に標準化されるのはいつ頃からでしょうか（註1）。そうしたプロセスは、一九四〇年代から、すなわち第二次世界大戦頃から、はっきりした形で進んでいきまし

た。注目すべきは、それと同時に経済学の「アメリカ化」が進んだこと、すなわち、それ以前の経済学の中心地がイギリスであった——多少誇張されてはいますが——のに対して、それ以降中心地がアメリカに移ったことです。

とはいえ、「アメリカ化」という言葉から連想されるように、大戦後世界の中心に躍り出たアメリカが、圧倒的な国力を背景にアメリカ独自の経済学を他国に押しつけたのではないかと考えるのは早計です。戦後アメリカを代表する経済学者のサミュエルソン——彼の教科書はマンキューのそれを上回る約四十カ国語（！）に翻訳されました——は、以下のように述べています。

一九四〇年以降アメリカ経済学は他を圧倒するような地位を占めるに至ったが、それが一層加速したのは、ヒトラーが席卷したヨーロッパから研究者たちを獲得できたからである。

事実、アメリカ経済学会の歴代会長には、シュンペーター、クズネツ、レオンチェフ、モジリアーニなど、ヨーロッパ大陸で研究を始め

の後アメリカに渡って活躍した経済学者が多く名を連ねています(註2)。ですので、右でいう「標準化」や「アメリカ化」の過程は、世界各国で発展してきたさまざまなタイプの経済学がアメリカを主な舞台として統合されていく過程、いわば「収束過程」でもあったわけだ。

ここでは、そうした過程を象徴的に表す人生を送った経済学者として、ヤコブ・マルシャックを紹介しします。彼は一八九八年ロシア帝国(現ウクライナ)のキエフに生まれます。ロシア革命が勃発すると、革命政党的右派に属する若き経済学徒——彼の先生は数理経済学者スルツキーでした——は、弱冠十九歳(1)でカフカス地方に成立した小共和国の労働大臣に就任しますが、レーニン率いる左派が革命の主導権を掌握していく中、故国を離れ西へ向かいます。果たして、この若き俊英は新天地ドイツで博士号を取得し、一九三〇年からはハイデルベルク大学講師として黎明期にあったマクロ経済学を研究するゼミを主宰します。しかし、ヒトラーが政権を掌握したドイツでは、ユダヤ系の出自である彼の居場所はなくなっていました。大学から解雇通知が届く前にイギリスへ亡命します。彼はそこでオックスフォード統計研究所の初代所長に就任(一九三五年)するのですが、時代はまさに「ケインズ革命」のさなか、イギリスだけでなくヨーロッパ大陸出身の優秀な経済学者も多く出入りし、この時代オックスフォード統計研究所は計量経済学研究のメッカとなりました。が、マルシャックはイギリスにも長くどどまることはありません。第二次世界大戦前夜、さらに西へ向かいます。ニューヨークを経てシカゴへ着いた彼は、コウルズ委員会の委員長に就任(一九四三年)します。戦時経済体制から平時経済体制へのアメリカ経済の軟着陸をいかにして実現するかが議論され始めた

この時代に、マルシャック率いるコウルズ委員会は「計量経済学革命」の世界的中心を担うこととなるのです。その後彼は、イェール大学を経てカリフォルニア大学ロサンゼルス校へ移りますが、晩年になっても旺盛な研究意欲が衰えることはありませんでした。一九七七年、内定していたアメリカ経済学会会長就任の直前、経済学のグローバルな「収束過程」を体現したかのような人生は、陽光注ぐ西海岸で幕を閉じたのです。

経済学の数理化・計量化を推し進めたマルシャックは、レーニンやヒトラーが支配する政治に翻弄された若き日の経験からか、なによりも、特定の価値観に依拠しない科学的な経済認識に到達しようという思いに突き動かされていたといえます。実際、「収束過程」を経て標準化された経済学は、文化や歴史の異なる世界各国に広まっています。

では、こうした収束と伝播という二重の運動を、経済学の広い意味でのグローバル化として捉えた場合、その功罪はどのようなものでしょうか。

明らかなメリットは、標準化された理論枠組やツールを用いることによって、世界の誰もが、経済学という学問の発展に貢献しうる条件が整えられたことにあります。例えば、日本の経済学者による世界レベルでの活躍は、他の人文・社会科学の状況とは大分違って、自然科学並みとは言いませんが、それに近いものになっています。

他方デメリットは何でしょうか。科学史家クーンは、ある学問分野でひとたび標準が出来上がってしまう(「パラダイム」が成立する)と、個々の研究はそのパラダイム内部の「パズル解き」に墮する傾向が強くなり、逆にパラダイムに収まりきれない問題は場当たりの説明

が加えられたり最悪の場合無視されたりするようになる、と指摘します。この説明の可否はともかく、確かに、知が標準化されると思考の硬直化とか柔軟性の喪失とかが生じるのではないかと懸念されます。事実、二〇〇八年の世界金融危機以降、「ここ数十年のマクロ経済学は、見当違いの方向に発展してきたのではないか」とか「大学の経済学教育は、標準化されたモデルにこだわるあまり、機能不全に陥っているのではないか」とかの指摘が繰り返されています(註3)。また、経済学者のなかには、危機後の状況を読み解くヒントを、標準化される以前の経済学者たちのテキストに求める人も出てきました。ここに表れているのは、深刻な問題を突きつけられても、オルタナティブが見つかりにくく、なかなか軌道修正できないというデメリットです。

私はここで、こうした功罪が経済学のグローバル化のみならずグローバル化一般に言える、と主張したいわけではありません。ただ、折角世界金融危機後という面白い時代に経済学を学ぶ機会を得た皆さんは、経済学を上のような観点からちよつと斜に構えて眺めてみてはいかがでしょうか。厳密かつ柔軟に思考するヒントが、そこにはあるような気がしてなりません。

1 以下の歴史記述は、H. Hagemann, *European émigré and the 'Americanization' of economics. The European Journal of the History of Economic Thought* 18.5: 643-71 に依拠した。

2 彼ら(シユネーター)以外はノーベル経済学賞受賞者です)の業績は、皆さんが受講している授業のなかにも出てきます。調べてみてください。

3 <http://www.economist.com/node/15908207>
<http://www.theguardian.com/education/2013/nov/10/economics-lecturers--accused-university--courses>